

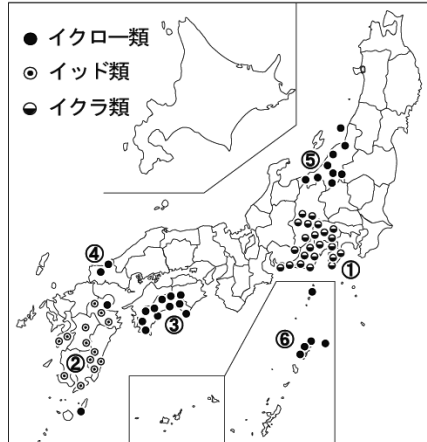
# 高知方言の推量表現

船木礼子（神戸女子大学）

## 1. 高知方言の推量表現の注目点

高知方言の推量表現には、動詞や形容詞の終止形に接続する形式「ロー」がある（右図③）。ローは「らむ」に由来するといわれており、少なくとも幕末頃の資料には用例が確認できる。ただし、時期によってローの接続の制約が変化しており、また推量表現に関連するほかの形式（ウ／ヨウ、チャロー、マイなど）の使用状況も変わってきている。この発表では、現在の高知方言のローがどのような使われ方をしているかを報告し、形態や接続の変化が何をもたらすかを考えたい。

図 ラム由来形式使用地域



（『方言文法全国地図5』237 図より）

## 2. 接続の変化と意味の変化—先行研究から—

高知方言の推量表現形式ローについては、次の2つの指摘がなされている。

1 つめはローの接続の変化についてである（船木 2000, 2014）。1865 年頃の武市瑞山の消息をみると、まだ「だろ<sup>う</sup>」相当形式が成立していないこの時期は、ロー（「ろふ」）は動詞や動詞接辞（丁寧マスを含む）の終止形に後接する例しか得られない。過去推量ではツローの用例が多い（わずかにタローもある）。またこの資料の用例では、ローは形容詞や否定辞などには付かない（ウ類やマイを使用）。それが、1935 年刊の土井八重『土佐の方言』（春陽堂）になると、ローは動詞だけでなく、否定辞ンにも、形容詞終止形にも後接するようになった（ただし「サムカロー」「ナカロー」などのウ類の推量形と併用）。この時期には「だろ<sup>う</sup>」相当形式のチャローも定着しているが、あくまで名詞・形容動詞語幹に接続するものだった。

- (1) 此着物ははでになつたけどまだ一二年は着れるろ一。（土井 1935:249）
- (2) この干物はもちとなましかつたらおいしかつろ一に。（土井 1935:173）
- (3) どーして一羽だけふとらんろ一。（土井 1935:211）
- (4) やーさんら一に泣かれちゃーなんぼかたまりなさいませろ一。（土井 1935:257）
- (5) このかきや赤いけんど濼いろ一。（土井 1935:259）
- (6) あの置物はからつちやろか金属ぢやろか（土井 1935:59）

この時点で、(1) 動詞・形容詞にはローが後接する、(2) 名詞・形容動詞語幹にはチャローが後接する、(3) 分析的傾向が進み、否定辞などにもローが後接するようになる、などの接

続上の変化が見られた。

2008 年になると、ジャローがヤロー（若年層はヤオ）に変わり、動詞や形容詞にも付くようになった。一方で、形容詞に残っていたウ類の推量形や否定推量のマイ、過去推量のツローは使われなくなった。つまり、〈4〉ヤローの接続する範囲が広がってローと競合する状態となり、〈5〉分析的傾向の進行により融合形が衰退したといえる。

2 つめはローの担う意味の変化についてである。横井（1981）によると、1980 年頃には若年層（当時 20 歳の話者）が動詞などにヤローを接続する使い方を始めており、その場合はローとヤローで意味が異なっていると説明している。動詞＋ローは「発話者自身が判断を下した結果なされる主観的立場にたった表現」、「推量した事象について、それが起こるであろうという確信は大きい」、「推量した事象が起こることに対する疑問の気持ちは小さい」という。これに対して動詞＋ヤローは「不確実な推量」の意味で用い、「判断を下した結果のことなどあまり重視しない、ごく軽い気持ちでなす推量表現」だという。

この意味に関する指摘から 40 年経ったが、形式の交替に付随する一時的な現象だったのか、複数の形式による意味の棲み分けが定着したのか。現在の使用状況から検討してみたい。

### 3. 調査結果

#### 【調査概要】

- ・実施：2024 年 2 月 15 日
  - ・調査方法：臨地面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。
  - ・調査協力者：高知市出身・在住の女性 1 名（1948 年生まれ、調査時 75 歳）
- ※ 補助的に、2008 年に調査した高年層男性 2 人、若年層女性 2 人のデータも参照する。

#### 3.1. ローとヤローの併用状況

結論から述べると、現在は、動詞・形容詞の終止形に接続するローと、動詞終止形・形容詞終止形・形容動詞語幹・名詞に接続するヤローとが、併用されている状況である。「イクロー」と「イクヤロー」には意味的な違いはほぼないようだ。なお、今回の調査協力者の世代はすでにジャロー（ジャロー）は使わなくなっている。また、若年層が使う新しい形式ヤオも使用しない。以下、共通調査項目の例文番号を [1] と示す。

- (7) タブン {イクロー／イクヤロー／\*イクジャロー／\*イクヤオ} [1]  
(8) コノ キモノワ タブン {タカイロー／タカイヤロー／??タカカロー} [18]  
(9) アノ ヒトガ ツクッタ リョーリヤッタラ タブン {オイシーロー／オイシーヤロー／\*オイシカロー}

推量に隣接するさまざまな用法においても、ほとんどローとヤローは併用の状態にあり、どちらも使用できる（共通調査項目の仮定条件の帰結 [80]、反実仮想 [81] [82]、疑い [85] [86]、確認要求 [91] [93] [94] [95]）。ただし、確認要求のうち「知識確認の要求・認識の同一化要求」[92]では、ローは使えるがヤローは非常に不自然で、否定疑問形「ヤッカー」や「ヤイカ」を主に用いる。

(10) イヤー ソンナコト シタラ {コワイロー/??コワイヤロー/コワイヤッカー} [92]

このことから、ローや否定疑問形は話し手の認識したこと(命題)を聞き手に押しつけ、同じ認識を持つよう迫る用法を持つが、ヤローにはこの用法がないか不安定で、ヤローは命題内容を推論したものとして聞き手に伝えて確認を求めるといふ、あくまで「推量」の範囲での用法しかないと説明できる。

ただし、若年層は「アブナイロー/アブナイヤロー/アブナイヤオ」がすべて使えるようになっており、若い世代ではヤローやヤオとローとの間に違いがない状態に至っている。

高知方言では推量形式のローやヤローは反語 [83] [84] や感嘆 [87] ~ [90] では非常に使いづらい。使ったとしても《疑い》の意味が強く、疑問の意味を持つ「ドレ」「ナンボ」を用いた感嘆文ではローが使えるが、疑問の意味を失っている「ナント」とは共起しない。

(11) ダレガ {スルノヤロカ/スルローカ (ゆ)} [84]

(12) ナント マー ヨー {タベルネー/\*タベルロー} [87]

(13) (飲み過ぎる人にあきれて) {ドレバー/ナンボ} ノムローネア (※2008年調査)

なお、高知方言のローやヤローは、東北地方の「ペー」のように感動詞化、終助詞化するところまでは運用的な拡張が進んでいない(例文 [110] [111])。

### 3.2. 否定推量形式の分析的傾向と形式の隆盛・衰退

動詞否定推量形式には否定辞+ローを専用しており、否定辞+ヤローやマイは使わない。形容詞の否定推量形式としても、この調査協力者はナイ+ローを使っており、ナイ+ヤローは使わないという。すでにウ類による「ナカロー」は使わなくなっている。

(14) タブン {イカンロー/\*イカンヤロー/\*イクマイ} [22]

(15) タコーナイロー/\*タコーナイヤロー/\*タコーナカロー [23]

(16) アメヤナイロー/\*アメヤナイヤロー/\*アメヤナカロー [26]

高年層においては、否定推量の形式は「-ンロー」か「ナイロー」で固定化され、ヤローはまだ否定辞やナイへの接続が認められていないといえる。ただし中年層や若年層は「イカンヤロ」「イカンヤオ」も使用するようになっている。

### 3.3. 「のだ」+推量形式

高知方言のローは「のだ」の意味を含んだものとして使われているように見える。準体助詞ガ/ンを使用する場合は、名詞接続に準じてヤローを使用する。

(17) ナカノ エイ ヒトニ サソワレタキ シカタノー {イクンヤロー/イクロー (ゆ)} [32]

(18) アノ キモノダケ ベツノ トコロニ シモーテ アルキ タブン {タカインヤロー/タカイロー (ゆ)} [33]

(19) ドーイテ {イクガヤロー/イクンヤロー/\*イクロー} [36]

今回の調査協力者は(17)(18)では誘導確認をすると使用すると答え、(19)では「イクロー」を「意味はわかるが言わない」と回答したが、少し上の世代に2008年に調査した際はローを使用し、また聞き手に直接に質問する(22)でもローが使えるとのことだった。

(20) 「どうしてこんなに雨が降るのだろう」《疑い》

ナゼ コンナニ アメガ {フルロー／フルガヤロ} (※2008年調査)

(21) 「あいつ、旅行かばんなんか持って、一体どこに行くんだらう？」《疑い》

イクガチャオ(カ)／イクガヤロカ／イクガヤオ(カ)／イクローカ(ゆ) (※2008年調査)

(22) オマー ドコ {イクロー／イクガ} ? 《聞き手への質問》 (※2008年調査)

高知方言では「のだ」が未分化な段階にあってローがこうした振る舞いを見せていたが、準体助詞「ン」「ガ」が成立した現在もこうした状況が残るのは、ローが動詞や助動詞、形容詞といった活用する語にしか後接できない(準体助詞に付かない)という接続上の制限をもつためでもあると考えられる。

### 3.4. 丁寧推量形式の状況

今回の調査協力者は、丁寧体使用場面では「標準語」を使用するため、動詞+デショー、形容詞+デショーを使用する。動詞+マスローや形容詞+デスローは不使用だが、理解語彙であり、自分より上の世代のことばとしてなら「イキマスロー」「タカイデスロー」なども使ったと述べている。

(23) タブン {イクデショー／#イキマスロー／\*イキマサヤロー／イキマスデショー} [37] [64]

(24) \*イクローデス／\*イクヤローデス [65]

(25) タブン {タカイデショー／#タカイデスロー} [38]

(26) タブン {アメデショー／#アメデスロー} [40]

つまり、高知方言の推量表現では、京都や大阪の「イキマッシャロ」のように、丁寧形式に推量専用形式のローが後接するという分析的な用法が一旦は成立したが、丁寧形式が必要な場面は標準語スタイルを選択するようになり、現在はデショーに取って代わられたといえる。また、丁寧形式にはヤローが付かないことから、丁寧推量ではローの領域にヤローが浸透して置き換え可能になる前に標準語形デショーに移行したといえるだろう。

## 4. まとめ

高知方言のローとヤローは接続上の使い分けがあったが、近年この使い分けが変わりつつあり、文末のモダリティ形式の再編が進んでいることを報告した。ローとヤローに意味的な違いは認められなかったが、否定推量や丁寧推量などにヤローが使えないなど、細かくみれば完全に置き換え可能にはなっていないことがわかった。しかし、名詞に接続しないというローの特徴は変わっておらず、そのことが「のだ」+推量などに影響していると考えられることなど、接続が用法に関与する可能性も確認できた

## 参考文献

- 国立国語研究所編 (2002) 『方言文法全国地図 5』 財務省印刷局  
土井八枝 (1935) 『土佐の方言』 春陽堂 (復刻版: 国書刊行会, 1975年)  
船木礼子 (2000) 「幕末以降の土佐方言における意志表現・推量表現形式の変化」『地域言語』 12  
—— (2014) 「高知方言にみる推量表現形式のバリエーションと機能の変化」『日本語学会 2014 年度秋季大会予稿集』  
横井真紀子 (1981) 「高知県中央部方言における推量表現」『高知女子大國文』 17